東南アジア研究　30巻4号　1993年3月

〈特集〉東南アジア海域世界の森と海

編者のことば

田　中　耕　司*

この特集号を編むことになった直接のきっかけは，文部省科学研究費補助金重点領域研究「地球環境の変動と文明の盛衰――新たな文明のパラダイムを求めて」（領域代表者：伊東俊太郎教授，国際日本文化研究センター，平成3～5年度）の公募研究として，「海域世界の森と海――21世紀の東南アジアと日本」が採択され，平成3年度から同公募研究のメンバーを中心に国内での調査旅行や研究集会がもたれたことによる。この特集号は，従って，この公募研究の中間総括という性格をもっている。

一方，東南アジアの海域世界については，東南アジア研究センターのスタッフが主にインドネシアを対象に行なってきた一連の調査研究がある。1978年に始まった南スマトラ研究，1980年に始まった南スラウェシ研究，そして1986年に始まった「マレー型農耕文化の系譜」などを経て，「東南アジア海域世界の動態に関する総合的研究」（1990，91年）や，現在進行中の「島嶼部東南アジアの変容に関する動態的研究」あるいは「海域世界の地域間比較」へと，この世界への関心が展開している。この特集号は，こうした一連の海外学術調査の成果を母胎にして編まれたものでもある。

ところで，このような一連の調査が実施されたが，「海域世界」そのものについての関心が高まってきたのは1980年代後半からのことと言ってよい。それまでは特定地域の社会形成や変容に焦点があてられていたが，特定地域をとりまくもっと大きな枠組み――といっても，ゆるやかに組織された枠組みであるが――があることに注意が向けられるようになった。それを例えば「マレー世界」という言葉，あるいは「海域世界」という言葉で表現するようになってきたのが1980年代半ば以降のことであった。こうして「マレー世界」や「海域世界」が，仲間うちのある種の「ジャーゴン」として定着するようになったが，その言葉の内包するところは個個の研究者の関心に従ってまちまちであったようである。

この特集号は，こうした仲間うちでの現在の研究状況を，この世界の「森」と「海」という二つの基本的な生態基盤に焦点を絞ることによって，さらにオープンな土俵にあげられないかという意図をもって編まれている。森と海をテーマとして掲げたのは，この両者が東南アジア海域世界の基本的な生態基盤であるというだけでなく，東南アジア地域研究という視点からも

* 京都大学東南アジア研究センター

重要であると判断したからである。いわゆる海域世界という用語は，これまで特定の歴史時代をさす言葉として使われるのが一般であったが，私たちはこれをもっと現在の東南アジアに引き寄せて，とくに島嶼部東南アジアの社会形成を理解するのに有用なフレームワークとしたいと考えるようになっている。そして，そのフレームワークの基本的な要素として森と海をとりあげようという意図がこの特集号のテーマに込められているのである。

この特集号がその意図に十分にこたえているとは言えないものの，以上のような関心をもって東南アジアの海域世界研究が進行中であることをここから汲みとっていただければ幸いである。ここに収録したのは，上記の公募研究のメンバーの一部，および海外調査の際にカウンターパートとなった2名の研究者（現在，外国人客員研究員として東南アジア研究センターに滞在中）の報告6編と，上記公募研究のメンバーを中心に行なった座談会の記録である。以下，各報告と座談会記録について紹介する。

高谷好一の「東南アジアの森と野と海」は，「森」と「海」の中間に広がる「野」も加えて，東南アジア海域世界の基本的な生態基盤としたうえで，それぞれの特性とそれを基盤にした社会の形成過程を論じている。東南アジアの海域世界には人を寄せつけない森があることの重要性が強調されており，その一方で進みつつある野の拡大が海域世界との関連でどうとらえられるかに言及している。最後に海域世界研究の今後の意義についても要約しており，この特集号のいわば総論として読まれるべきものである。

Domingo M. Non の“Moro Piracy during the Spanish Period and Its Impact”は，歴史家らしく，海域世界についてのもっともオーソドックスなアプローチを見せる論文である。スペイン時代のモロの海賊活動が，植民地の圧政に対する反動として，あるいは宗教対立を背景にして始まったという通説に対して，それ以前からの奴隷貿易の延長としてとらえられているところが主要な論点である。海賊活動がフィリピン全域にわたっただけでなく，その交易がオランダ東インド会社とリンクしていたことなどを明らかにして，当時の海域世界の広がりを想定させる点も興味深い。宗教対立が現在にまで続くなかで，その宥和を願う気持が本論文のなかに込められている。

前田成文の「ブギスの森と海」は，海洋民族として知られるインドネシア南スラウェシ州のブギス人がもつ森と海の観念世界と現実との関連を論じている。ブギス人の現実の生活空間である農業空間からみた森と海のもつ結界力や，農業空間に残る森と海の原風景など，ブギス人の森と海についての心象風景が紹介されている。

田中耕司の「東南アジア海域世界と農業フロンティアの拡大」は，島嶼部東南アジアに広がりつつある野の世界，すなわち農業空間もまた海域世界と共通する性格をもつことを論じたものである。南スラウェシ州への農民移住を事例としてとりあげているが，そこで見られた離散移住，商品化，ネットワーク性などの特性が，すでに安定した農業空間の人々にも見られるこ

とから，その特性を活かした将来の農業発展の可能性を示唆している。

Hood M.S. の“Man, Forest and Spirits: Images and Survival among Forest-Dwellers of Malaysia”は，彼自身のオラン・アスリの詳細な人類学的調査の経験をもとに，マレーシアの森林生活者の比較研究を行なったものである。森と人との関係が種族によってどのような違いを見せるかというテーマと，森林居住者と森の精霊的存在とのかかわり合いというテーマの二つに焦点をあわせたもので，マレーシアのコンテクストのみならず，広く森文明を考える時に参考になるものと思う。

大木昌の「森林利用の諸形態——ジャワと日本における焼畑の比較試論」は，集約農業が展開したジャワと日本で，なぜ一方で森林が消滅し，もう一方でそれが残されたのかを明らかにしようとする試みである。焼畑を森林利用の一形態としてとらえ，ジャワと日本の森林利用の違いを歴史資料の分析から明らかにしている。海域世界に直接には言及していないが，両者の違いが現れた背景に，ジャワのもつ海域世界的な性格があったことを示唆している点が興味深い。

以上の6編の個別論文に加えて，この特集号のテーマをめぐる座談会の記録が収録されている。ここでは個別論文で十分に展開されていない「海域世界」そのものをめぐる諸問題が議論されている。参加者のあいだで海域世界のとらえ方が異なり，ときには意見の対立が鮮明にあらわれた場合もあるが，私たちが「海域世界」にどのような思いを込めているかを，おぼろげながらではあるが汲みとっていただけるかと思う。正直なところ，座談会記録をまとめての率直な感想は，東南アジアの海域世界像が十分に浮き彫りにはされなかったということにつきる。けれども，この座談会で議論されたような内容を思考の枠組みとしてもつことは，東南アジアの「地域性」を考えるうえで重要だということだけは，座談会参加者一同の認識として共有できたかと思う。

東南アジアの海域世界研究は今も進行中である。座談会参加者の数名は，現在，インドネシアのカリマンタンでこのための調査研究を実施している。また，他の数名は東南アジアと他地域の海域世界の比較研究に向けて，東南アジア以外の地域へも足を延ばしている。こうした進行中の調査研究がひと区切りする時点で，あらためてこの種の議論が深化することを期待したい。そのための捨て石としてこの座談会が位置づけられれば，その意義もあったと言えるのではないかと思う。

最後になったが，この特集号を編む直接のきっかけとなった上記の重点領域研究を主宰された領域代表者の伊東俊太郎教授，そして総括班事務局で研究活動の種々の企画・準備にご苦労いただいた安田喜憲助教授（国際日本文化研究センター）にこの場をかりてお礼を申し上げたい。また，座談会記録のテープ起こしを手助けいただいた柳沢雅之君（京都大学大学院農学研究科院生）にもお礼申し上げる。

（1992年11月，ウジュンパンダンにて）

Forests and the Sea in the Southeast Asian Maritime World

Editor's Note

Koji TANAKA*

This special issue is the outcome of a research project entitled "Forests and the Sea in the Maritime World: Southeast Asia and Japan in the 21st Century," which is part of an overall research project entitled "Changes of Earth Environment and the Rise and Fall of Civilizations" supported by a special grant-in-aid from the Ministry of Education and Culture of Japan. In addition, this issue is the outcome of CSEAS's long-term overseas research activities into the environments and societies of the Southeast Asian archipelago. The term "maritime world" is used here not solely as the conventional, historical concept relating to "the age of commerce" in Southeast Asia, but in a wider sense to indicate the characteristics of the societies and human beings in the archipelago.

Six papers and the record of a panel discussion are included here. Takaya's paper, which deals with the ecological background of the Southeast Asian maritime world, divides this into three basic spheres, sea, forest, and farm land, and describes the characteristics and the significance of each sphere. Domingo's paper, dealing with Moro piracy in the Spanish Period, argues from various historical documents that the piracy was not a reaction against Spanish dominance but the continuation of a pre-Hispanic, slave-trade tradition, and indicates that the present Muslim-Christian relations find their roots in these unfortunate historical incidents. Maeda's paper tries to portray the image of the forest and the sea perceived by the Bugis of South Sulawesi, who are famous for their maritime activities in the Southeast Asian archipelago, and discusses the recent changes in these traditional images owing to the rapid influence of modernization. Tanaka's paper, which presents a case study of peasant migration to South Sulawesi, concludes that even the agricultural societies of the archipelago have maritime characteristics, and proposes a possible way for developing agriculture by means of combining such characteristics with development schemes. Hood's paper examines the close interaction between man and forest among selected forest-dwelling communities in Malaysia. He makes use of

* The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

ethnographic studies of field-workers within the last 30 years in order to illustrate not only the use of the forest and its products for subsistence but also the wider involvement of forest-dwellers with the spirit world, which is portrayed in their belief systems. His study implies that to an important extent, the survival of forest communities depends on the nature of exploitation of the forest as a resource. Oki's paper is a unique attempt at comparative study of the differences in forest utilization between Java and Japan, both of which are famous for the intensiveness of their agricultural systems. It focusses on shifting cultivation in both countries, and he concludes that industrialization is one of reasons why Japan has preserved forest areas at a higher rate than Java. A panel discussion aimed at clarifying the concept of our term "the Southeast Asian maritime world" and at building on an overall view of world is recorded under the same title as this special issue. Even though we cannot say these aims were successfully achieved, the record points out various aspects relating to the Southeast Asian maritime world and gives a new implication to the conventional terminology of maritime world.

It is our pleasant duty to thank Prof. Syuntaro Ito and Assoc. Prof. Yoshinori Yasuda of the International Center for Japanese Cultural Studies, who are responsible for the organization and the general coordination of the project, respectively. Special thanks are also due to Mr. Masayuki Yanagisawa, postgraduate student of Faculty of Agriculture, Kyoto University, for typing out the original record of the panel discussion.

(Ujung Pandang, Nov., 1992)